

ミンダナオの風

Hangin gikan sa

MINDANAO



森の精のような
バゴボ族の女の子
名前はアロナ、五歳。
彼女の後頭部には
大きな傷がある。
サントルの実をとろうとして
木から落ちたの。
ケガをしたとき
父さんは山をかけおりた、
わたしを背負って
麓の村のヘルスセンターめざして。
心配ですね
町の病院でCTスキャンを受けたほうがいい、
と言われたんですよ、
そのあとドクトルは、なんと言ったと思います。
いっしゅん息をつめて
父親は、私の顔をまじまじと見つめた。
それから、横を向いて吐きすてるように言った。
3000ペソで安いもんでしょ、だだよ！
山の民の生活は
ほとんど自給自足だから
現金収入というものが皆無に近い。
なんとかその、CTスキャンとかいうもの
受けさせてもらえないかね
娘のことが、しんばいで、しんばいで。
少女の頭の傷は、いまも膿んでいる。(松居友)



『ミンダナオ子ども図書館』は、フィリピンのセック登録法に基づき現地法人として認可されました。読み聞かせ活動、子ども図書館、医療プロジェクト、スカラシップ、子どもシェルター、難民センター、孤児施設などを現地法の認可に基づいて行います。



Primary purpose

1、本をとおしでのコミュニケーション

私たちは、ビサヤ語圏や先住民族の言葉で語られた昔話やおとぎ話を、普及させたいと思っています。そのためにも定期的に冊子を出しています。また、マニラの子ども博物館やACCU（ユネスコアジア文化センター）とも関係を持ちながら、画家、編集者、作家とミンダナオの若者や子どもたちのコミュニケーションを相互に図っています。こうした計画を推進するに当たって、東京に本部を置きタイやスリランカでも活動予定のLFAC（アジア子ども文庫）がサポートしています。

『ミンダナオ子ども図書館』の主旨は、ミンダナオの子どもたちや若者に、本をめぐる活動を通して社会活動や創造活動に参加する楽しさを伝えることです。とりわけ、私たちは、貧しい子どもたちを活動の中心にすえています。

2、ハウスライブラリーとストーリーテリング

『ミンダナオ子ども図書館』のスタッフは、経済的に貧しい辺境地域や小さな山村を好んで、絵本や童話の読み聞かせに訪れています。活動の第一段階は、本を見たこともない子どもたちが、絵本を読んだりお話を聞くことの楽しさを通して、本への関心をもってもらう事です。特定の地域をくり返し訪れて、子どもたちが読書に興味を持ち始めたところで、第二段階としてボックスライブラリーを設置しています。

ボックスライブラリーというのは、箱に本を詰めてぬいぐるみといっしょに持っていき、村の特定の家庭に設置して貸し出しをおこなう簡易図書館の事です。設置したボックスライブラリーは、一定の期間をおいて新しいセットに取り替えます。これにより子どもたちは、各自家庭に絵本や本を持ち帰り、より深く本を読む楽しさを味わうことができます。

第三段階は、家庭に本棚を作り絵本を置くハウスライブラリーです。ハウスライブラリーは、『ミンダナオ子ども図書館』のランチとしての機能も持っています。町村の教育や読み聞かせ活動に関心のある方々の許可を得て、家庭内に文庫を作り一般に開放します。本の貸し出しもしますが、すべての本はメインオフィスのコンピューターにインプットして、貸し出し中の本を把握し、時期が来たら取り替えて内容を変えていきます。

Secondary purpose

1. 医療プロジェクト

医療プロジェクトは、訪問先の村で出会う、病気や手術を必要としながらも貧しくて医療を受けられない子どもたちのために始めたプロジェクトです。山岳民族の村や戦闘難民キャンプを訪ねると必ずといってよいほど治療や手術を必要としている子どもたちに出会います。知らぬ顔をして素通りできないので、できることはやろうと言う主旨から開始しましたがひじょうに評判が良く、今では私たちの来る噂を聞いて、わざわざ親が子どもを連れて、遠くから足を運んで待っているような状態です。



出生届けもない子が多く、町で手術を受けるために、私たちが書類手続きから町の病院までの足代や食事、病院の手はずまで整えて、手術後は家にまで送り届けるといった、全面的救済のお手伝いをするプロジェクトです。非常に労力と手間のかかるプロジェクトですが、本当に貧しい地域の子子どもたちは、ここまでしないと救済できません。メディカルミッションのような治療も含めた組織的な活動ではなく、貧しい人々とメディカルミッションとをつなぐような地味な活動ですが、読み聞かせでたえず貧しい村々を回っている利点を生かし、ボードメンバーで看護婦のマリセールさんの采配のもとで看護学の奨学生たちと細かな救済活動を展開しています。

また、体だけではなく心のケアという意味では、ストーリーテリングが小さくない働きをしています。とりわけ、戦闘で難民が多く出ているような難民センターの子子どもたちは、情緒的にも心の傷を負い、また食べ物にも事欠く生活のなかで両親にもゆとりがなく、喜びを失った日々を余儀なくされているからです。私たちの活動は、その中心を子どもにしていますが、とりわけミンダナオではマイノリティーに属するモスリムと先住民族の子子どもたちに比重を置いています。

2. スカラシップ

私たちは、限られた学生ですが、より高い教育を受けるための奨学金も用意しています。とりわけ高校と大学の高等教育に視点をおいています。現在は『ミンダナオ子ども図書館』のスタッフたちが奨学金を受けて、幼児教育、学校教育、看護医療、図書館司書といった専門分野で学んでいます。スカラシップは、教育と医療の分野における限られた学生を対象としていますが、将来は貧しい先住民族とモスリムの若者たちを視野に入れたいと思っています。

3. 子どものシェルターと孤児施設

私たちは、フィリピンの公の機関であるDSWD（社会福祉局）の要請もあり連携を持ちつつ、子どものためのテンポラリーなシェルターを引き受けます。とりわけ栄養失調のストリートチルドレンや、戦闘時に多くでる難民の子子どもたちに、所在を提供する公に認められたセンターとして活動することも可能です。また、将来的には、貧しい地域や戦闘地域に多い、親を失った子どもたちのための孤児施設として活動する許可も公に認められています。

より詳しく活動内容や活動状況をお知りになりたい方々はホームページをご覧ください
ビサヤ語、タガログ語、英語、日本語でご覧になれます

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/>

一人の子どもを救済するためにも、多くの活動と、 それを巡る許可が必要となるのです。

館長・松居友

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
お金が無くて学校に行けないときと
病気になるっても病院に行けないとき・・・



セック登録がないと・・・

セック登録がないと、すべての
の社会活動は無認可の非合法活
動と見なされてしまいます。寄
付を募ることも、冊子の発行も
法的には許されていません。

セック登録後初めて正式に許
可され、ファンデーションと名
のることができのです。

『ミンダナオ子ども図書館』
の活動目的は「貧しい子どもた
ちを支援すること」。

支援の方法は、「子どもの成長
と発達支援」と「医療と救済活動
支援」の二つに分かれています。

成長と発達支援は

1. 本とおとしてのコミュニ
ケーション
2. ハウスライブラリーとス
トリーテリング

図書館活動を通して、貧しい子
どもたちの心の成長と発達を支
援するものです。

医療と救済活動支援は

1. 医療プロジェクト
2. スカラシップ
3. 子どものシェルターと孤
児施設

スタッフや奨学生と協力して、

貧しい子どもの生活医療救済プ
ロジェクトを行います。

ずいぶん欲張った内容だなと
思われるかもしれませんが・・・

ずいぶん欲張った活動内容だ
なと思われるかもしれませんが、
実はそうでもないのです。とい
うのはこれまでの経験から、一
人の子どもの救済にも、すべて
の許可を得ておく必要が出てく
るからです。

わかりやすくするために、例
を追いつながら説明しましょう。

先住民の村ブロックの例

先日ブロックというバゴボ族
の村に読み聞かせと呼ばれまし
た。もちろん電気もなく、石臼で
粉をついて粉にして自給生活を
している純粋な先住民の村です。
とうぜん子どもたちは、絵本を
見たこともありません(本を通し
てのコミュニケーション)。

私たちは、今までのオフィス
以外にもう一つ新たに部屋を借
りて、『ミンダナオ子ども図書
館』を作りました。近くに小学校

もあり子どもたちも訪れます。

オフィスはすべて奨学生たち
が仕切っています。毎週の日曜
日は2ヶ月後まで読み聞かせの
スケジュールがびっしりです。
(ハウスライブラリーとスト
リーテリング)

その日、私たちは5時に起き



6時に朝食をとり7時に出発、
途中で仲介者を乗せて目的のブ
ロック村へ。

森の中の道で案の定、車はス
タックしてしまい村の人々が助
けに来てくれました。これしば
しば起こるのです(大型四輪駆
動車が欲しいなあ・・・トヨタさ
ん寄付してくれませんか)。

村に着くと早速ゴザをしいて
読み聞かせを始めます。奨学生
のお姉さんお兄さんの読み聞か



せに子どもは夢中。
『ミンダナオ子ども図書館』のメンバーは結構な大家族です。

ボードメンバーが5名で、軌道に乗るまで松居友が館長を引き受けることになりました。顔が広く役所関係に強い設計技師の二口氏が副館長、看護婦のマリセールさんが医療担当、図書館司書のベビンさん、エープリルリンが経理担当。

スタッフは農地運営をサムエル氏。奨学生は大学生が6名、高校生が3名、小学生が2名です。から15名近い大所帯です。

皆さんからの寄付は純粋に活動費に消えますから、スタッフの生活は私の個人収入とサムエル氏の栽培する農場の作物だけ。私財を投入しての活動です。また、経理に厳しく、コーラ一本に至るまで領収書をとる、公私をわけたクリアな会計が特徴です。

奨学生たちは、学校に行く

同時にスタッフとして活動してくれています。

学んでいるのは、図書館学、教育学、看護学など活動に役立つ



看護学のボニファッショ君(18)

ものばかり。彼らを支えているのが『ミンダナオ子ども図書館』



の奨学金制度です。(スカラシップ)

読み聞かせは大成

現地の子どもたち

奨学生たちもこの活動をとても楽しみにしています。プロック



村は初めての訪問地でしたが、その前の週はすでに5度訪問した場所でも子どもたちも読書になれてきたので『アジア子ども文庫』の支援でボックスライブラリーを設置しました。

本とぬいぐるみの詰まった箱を家庭に2ヶ月ほど置いて貸し出し、後に新たな箱と取り替えるこの図書館活動に子どもたちも大喜び。

需要は増える一方ですが、購入資金が不足しているため、ダバオの古本屋から買い増している状態です。日本の絵本の寄贈も増えているのですが、それよりも現地の出版社を支援する

ためにも絵本を買う費用が欲しいというのが正直な気持ちです。(ハウスライブラリーとストーリーリーディング)。



読み聞かせをしていると、杖をついた足の悪い男の子が父親に連れられて山から下りてきました。

足にふとい枝が刺さり腫んでいます。裸足の生活ですから、傷口は汚れ化膿がひどい。

また別の女の子は、頭に銃弾をうけて半分が化膿しています。まだ元気ですが緊急の手術が必要。大きな手術ですからダバオ市の病院にコンタクトをとらねばなりません。

病院とのコンタクトや治療は看護婦のマリセールさんの指示

を仰ぎます。

前回の支援で合計15万円が集まり9人の子どもたちを救いました。まだ9名の子どもが手術待ち。読み聞かせに行くたびに新たな子どもが出てきてこちらも資金が足りません。(医療プロジェクト)



子どもを緊急に泊めるとして、許可がないと誘拐や幼児虐待と見なされかねません

大きな手術は、ダバオ市の病院の予約が必要ですが、小さい手術はキダパワン市でもできるので、その日は足の悪い子どもとお父さんだけ図書館に泊まっていたいただき、翌日に手術をすることになりました。ここで、セック登録が役に立ちます。子どもを



緊急に泊めるにしても、許可がないとこの国では誘拐や幼児虐待と見なされかねないので。

先日は、戦闘の続くモスリム難民キャンプを訪れましたが、



戦闘で焼けた小学校跡で勉強するモスリム難民の子どもたち



緊急の宿泊場所を必要としている子どもたちを収容したり治療を提供したりするにも、法的許可が必要です。

この許可を得るために『ミンダナオ子ども図書館』は、難民や子どもたちの緊急避難場所として提供できる1ヘクタールの農地を個人資金で購入しました。大学、高校、小学校が近く、近い将来には『アジア子ども文庫』に寄せてくださった皆さんの寄付で図書館を建設する予定です。

農地は現在、スタッフの自給用として野菜を生産予定ですが、アポ山が見えてきれいな場所なので、いつか子どもたちのシェルターを兼ねた皆さんのためのボランティアハウスも建てたいと思っています。(子どものシェルターと孤児施設)

孤児施設を申請したのは、大規模な孤児施設ではなく、難民キャンプや山村に必ず孤児がいていくつか数人でも、家族同様に引き受けることがあるかもしれないと考えてのことです。



ブロック村での読み聞かせが終わった後、私たちは、子どもを病院に連れていくために、親の承諾書と責任の所在と限界を明記した書類にサインをしてもらい、親子を車に乗せてキダパワンに向かいました。

翌日、子どもの手術は無事に済み、村に送り届けることができました。大きな手術の場合はさらに村長さんやDSWD(福祉局)の書類を整備します。

もうおわかりかと思いますが、一人の子どもを救済するためにも、これだけ多くのボランティア活動と、それを巡るさまざまな許可が必要となるのです。



幽霊の出る町

ベビン・フロリモン 『ミンダナオ子ども図書館』 奨学生

イノグウグは、マギンダナオにある集落です。そこは、パガルガン町から遠く離れた平和な村でした。パガルガンの人々は、ほとんどがイスラム教徒です。イノグウグで戦闘が起こり、町に強制的に避難させられてからというもの、人々は武装した兵士同士の戦争を避けて畑を離れざるをえませんでした。昼間だけこわごわ畑の様子を見に出かけて、夜には避難場所に帰るという毎日です。

私は、ジブディンさんという名の難民と話しました。彼の言葉によると、この地で戦闘が始まったのは、2000年に政府軍とモスリム部隊がイノグウグで衝突したのがきっかけでした。

それまでは、村にはたくさんの家が建っていました。しかし、攻撃で家は焼け、学校も焼けてしまいました。誰が火をつけたのかという事に関しては、政府軍もモスリム部隊も相手がたに罪をなすりつけるだけで、何の責任をとろうともしません。人々は、なすすべもなく畑を離れ、弾丸や爆弾のこない安全な場所に避難する以外に方法がありませんでした。一年のうちに何度も戦闘があると、難民キャンプから離れることが出来なくなり、けっきょく自分の家を放棄する以外に道がなくなります。町の近くに土地を探し、比較的安全な場所に家を建てざるをえなくなるのです。

私たちは、イノグウグに2003年の4月9日に行きました。そのとき私は、その地の豊かで広々とした様子にびっくりしました。いろいろな作物が植えられています。しかし、よく見るとココナツの幹が弾丸で裂けていました。私は、イノグウグの人々たちが力を合わせて建てた学校も見ました。しかし、翌日にもどってみると、その学校が9日の夜に焼けたというニュースを耳にして愕然としました。再び戦闘が始まったのです。学校は、政府軍とモスリム部隊の戦闘で勉強が続けられなくなった子どもたちのために、特別に建てられたものでした。その学校が燃やされてしまったのです。

戦闘はイノグウグの村だけではなく、パガルガンの別の村でも起こりました。そこでは、武装した兵士の姿も見られました。それ以来、人々はこのあたりを「幽霊の出る地」と呼んでいます。なぜならこの地のあちこちで断続的に戦闘が起こるからです。人々は武装した兵士たちがとつぜん起こす戦闘をひどく恐れています。それは、まるで夜なかにふいに、えたいのしれない幽霊があらわれるのと似ているからです。

人々が幽霊が出ると呼んでいるのは、ふつう戦闘が夜に始まるからです。その時は、同時多発的に爆発音が聞こえ、家も動物も大切な持ち物も置き去りにして避難しなければなりません。大切なのは自分や子供たちの命なのですから。

戦闘がある限り、彼らは難民センターで窮乏生活を送らなければなりません。学校も、安全な地域の学校に転校しなければなりません。政府機関も司教区も援助の手をさしのべてはいますが、しかし、あまりにも多い難民が地域に散らばっているため、食料援助は不足しがちで、ビニールシートをかぶせただけの小屋で寝るのがようやくで、けっして安全とはいえません。とりわけ赤ちゃんがいる家族や病気の人は大変です。難民たちは、食料やシェルターや薬を必要としているばかりではありません、何よりも平和を求めているのです。自分たちの村にもどって、不安や恐れのないふつうの生活が出来ることを願っているのです。しかし、政府軍とモスリム部隊の時と場所を選ばぬ散発的な戦闘があちこちで起こる限りは、ふつうの生活に戻ることが出来ません。

どうやって平和を見いだしたら良いのでしょうか。こんなにも長い間求め続けている平和を。私たちは、政府機関の人々が、早急にこの問題を解決してくれることを切に希望します。また私たちは、心ある皆様方が、彼らを支援し平和に向けて絶えず祈ってくださることを願ってやみません。





Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

SEC REG. NO.CN200315083

River Run Apartment Lanao. Kidapawan City North Cotabato Philippines

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/>

Tel/Fax 064-288-5426

METROBANK ACCOUNT NO.337-3-33706097-9

『ミンダナオ子ども図書館』を通して、ミンダナオの貧しい子どもたちを支援して下さる方々へお願い。活動目的の違いによって、二つの振込先がありますのでご注意ください。郵便振り込みのさいには、必ず住所とお名前をご明記下さい。

ミンダナオは非常に郵便事情が悪く、到着しないことが良くあります。お礼とご報告は、年4回発行の当通信に代えさせていただいていますが、別途、領収書または報告が必要な方は、ご面倒ですがEメールかファックスでご連絡ください。

刻々と増える医療救済活動や読み聞かせ活動、現地でしか得られない報告やスタッフの記事など、さらに詳しい活動状況をお知りになりたい方は、ホームページをご覧ください。



<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/>

mindanao@zap.att.ne.jp

Tel/Fax 064-288-5426

Primary purpose

子どもの成長と発達を支援して下さる方々へ

- 1、本をとおしてのコミュニケーション 2、ハウスライブラリーとストーリーテリング

『アジア子ども文庫』の郵便口座を通して寄付をお願いいたします。

『アジア子ども文庫』は、フィリピン以外の貧しい地域にも文庫活動を展開しています。

郵便振替口座番号 00110 8 52331

加入者名 『アジア子ども文庫』

Secondary purpose

子どもの医療と救済活動を支援して下さる方々へ

- 1、医療プロジェクト 2、スカラシップ 3、子どものシェルターと孤児施設

『ミンダナオ子ども図書館』の郵便口座に寄付をお願いいたします。

郵便振替口座番号 記号0010 0 番号18057

加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』 代表松居友